# 推 薦 文

文化科学研究科・地域文化学専攻・教授　吉田　憲司

今回論文を応募する米倉立子は、お茶の水女子大学博士課程に在籍し、2004年度の国立民族学博物館の特別共同利用研究員として、推薦者が指導している。

本応募者は、修士課程よりイタリアにおける初期キリスト教美術史を研究してきた。2002年12月にエチオピア北部、ティグレ州の岩窟教会の調査に初めて参加し、以来それら教会堂の現地調査や史料収集を続け、特に壁画に関する考察を進めている。

今回応募した論文、「エチオピア北部、ティグレ州の岩窟教会堂壁画ーマリアム・コルコル修道院教会を例にー」において、応募者はこれまで日本の美術史研究者による研究が行われてこなかった、エチオピア北部の岩窟教会堂壁画を対象とし、その装飾プログラムを詳細に論じている。

テーマとして取り上げた、教会堂の装飾プログラムという分野は、ヨーロッパの教会堂を考察対象したものについては、19世紀来の膨大な史料解読の蓄積や考古学発掘などを背景に、研究もかなり進み、細分化されている。それに対し、エチオピアの岩窟教会堂壁画に関する研究は、本格的な調査が始まったのが1970年代と遅く、いまだ出版された体系的な壁画の図像集もごくわずかという状態である。方法論としては、ヨーロッパの教会堂壁画の研究を参照することは可能であるが、現地へのアクセスの難しさ、既存の図像史料の少なさなどから、既往研究も少なく、これからの研究が待たれる分野である。個別の図像主題の研究は欧米の研究のなかに散見されるが、特に装飾プログラム全体を視野に入れ、教会堂の空間的なまとまりの中で、いかなる構想の下に主題や配置が選択され、壁画装飾が組み立てられているかという観点の考察は、皆無に等しい。

本論文で、応募者は既往文献を参照した上で、実際の現地調査を基に、独自の見解を提出している。その見解は、イタリアにおけるキリスト教美術についての豊かな知見を踏まえているだけに、説得力のあるものとなっている。しかも、教会堂の立体的空間の中で図像がいかに配置されているかという点に留意した考察をおこなった結果、従来の研究にみられような、ある場面だけを切り取って比較する研究では触れられてこなかった場面同士の相関関係を浮かび上がらせた。また一つの教会堂の壁画全体を見渡して論じるという方法は、その創建の経緯や歴史的背景、さらに岩窟教会堂がおかれている自然環境、風土といった特質を考慮にいれた、壁画のより包括的な理解に道を開くものとなっている。

本ジャーナルに掲載するにふさわしいものとして、ここに推薦するしだいである。